

2015 年度森泰吉郎記念研究振興基金

研究成果報告書

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
修士課程 2 年 西 恵里奈

1) 研究目的

パブリック・ディプロマシーにおけるマネジメントの現状を日米比較するため、アメリカ政府が行うニュー・パブリック・ディプロマシーの事例研究として、米国国務省が実施する交流外交プログラム International Visitor Leadership Program (IVLP)における 政府/民間アクターの関与の実情を明らかにする。

2) はじめに

私は学部で国際関係学とメディアを学び、現在は大学院でパブリック・ディプロマシーの研究を行う。学部の卒業論文では「ソーシャルメディアを用いたパブリック・ディプロマシー — 北欧諸国の事例研究からの提案 —」と題して、駐日フィンランド大使館、スウェーデン政府の SNS 上での取り組みに関する研究を行った。国際関係学とメディア・スタディー専攻の背景から、パブリック・ディプロマシーにおける SNS また広報活動の重要性に強い関心があり、アメリカ国務省が実施するパブリック・ディプロマシー政策の一つ International Visitor Leadership Program (IVLP)をマイアミ(南フロリダエリア)で担当する NPO 団体 Global Ties Miami でのインターンシップに参加した。駐日アメリカ大使館の Public Affairs Section での半年間のインターンシップを通し、アメリカ政府が他国である日本においてどのような広報外交活動を行っているのかを見てきたが、今回は自国アメリカの地でどのように海外からのビジターを受け入れているのかを現場で見ることができた。この経験を踏まえ、本レポートでは外務省が他国の市民を対象に実施する招待プログラム、交流プログラムへの提案を行いたいと思う。

2) 海外活動概要

期間	2016 年 2 月 7 日～3 月 21 日
派遣都市	Miami, FL
インターンシップ実施組織	Global Ties Miami (http://globaltiesmiami.org/) 2103 Coral Way #200, Miami, FL 33145
組織概要	アメリカの国務省が実施するパブリック・ディプロマシー政策の一つである International Visitor Leadership Program (IVLP) のマネジメントを担当する団体、Global Ties U.S. の Community-based member としてマイアミ(南フロリダ)でのプログラム実施の運営/管理を担当する。



3) 日本が米国から学ぶべき点 (政府プログラムにおける市民の役割と参加)

Home Hospitality

IVLP のプログラムにおいて、絶対ではないが国務省より導入するように強く勧められている要素の一つが現地のアメリカ人家庭にてディナー等のおもてなしを受ける「Home Hospitality」である。Global Ties Miami ではディレクターや会員の自宅でこれまで実施してきたそうである。この Home Hospitality は IVLP 参加者からの評判も高く、これまでの IVLP において最終的にどのアクティビティーが良かったかという質問に参加者に聞くとこの Home Hospitality と答えが多いとのことである。

私のインターン期間中に開催された IVLP では実際に家庭で Home Hospitality を行ったものはいなかったが似た要素を含む Potluck Dinner が開催された。これは近東/北アフリカ地域から Combating Trafficking in Persons をテーマにした IVLP プログラム参加者約 15 名を対象に実施した持ち寄り型のディナーパーティーである。会場は団体が入るシェアオフィスを利用し、ビジターに加え、団体の会員である一般の市民の方々やマイアミ在住の近東出身の方、そして私たちインターン生などグローバルで多様な総勢 40 名ほどが手料理を持って集まった。会場はテーブルクロスやキャンドル、国旗などでデコレーションされ家庭的な雰囲気を出すように工夫されている。Global Ties Miami では Home Hospitality の代わりにこのような一般市民も参加できるこのようなイベントをよく開催しているとのことである。以下写真は Global Ties Miami の Facebook サイトより Potluck Dinner の様子。



左: 会場の様子



右: 食べ物を話題に会話するビジターと市民。

プログラム中にすでに会うことが決められているスピーカー達との出会いはビジターにとってプロフェッショナルな立場でのものであり、かつアメリカ政府により「見せられている」アメリカの人々である。一方でこのようなイベントではより日常的な一般市民を知ることができ、また食事とお酒を楽しみながらビジターもリラックスしてコミュニケーションが取ることができる。日本が行う海外からのビジター向け招聘プログラムの内容がどのようなものになっているかははっきりとはわからないが、オリンピック誘致でも言われていたように、日本のおもてなし精神をもってしてこのような取り組みを行うことができれば必ず相手の心に残る高い効果が期待できるだろう。

4) 日本が米国から学ぶべき点(仕組み作り)

また、私のインターンシップ期間中ディナーイベントの他にソーシャルイベントの開催を見ることができた。このイベントは2月の下旬4つの IVLP プログラム、1つの国務省主催プログラミングが開催されたので、全ての参加者をまとめて招待する形で簡単な軽食とお酒が出るイベントを開催した。まず、特筆すべきはその会場となった施設である。日頃本団体で開催するイベントは上記で書いたようにオフィスの一角を使ったところが多いが、今回は新たな挑戦で普段はスモーク噴射などを利用するナイトライフ向けの場所で行われた(右下写真参照)。日本でいうところの渋谷といった感じで週末になると若者が出歩く人気エリアである。写真にあるようにかなり混み合った中、明かりを暗めに設定している、この雰囲気の中約 40 カ国からの国務省プログラム参加者、また現地在住者が約 3 時間楽し

んだ。結果として、本イベントは人々の盛り上がり方、混ざり合い具合ともに大成功だったように思える。後日インターン先の上司とこの件の成功点について話したことをまとめてみたい。

日頃行うイベントも盛り上がるが、今回は会場の雰囲氣的にも参加者がより気軽に話しかけあえるものであったと上司は分析していた。またマイアミという都市では、他のアメリカの都市に比べるとよりネットワーキングやパーティーといった機会に人々は常日頃晒されているということで一般参加者の人もこのようなイベントでの振る舞い方を心得ているため、このような場面に突然放り込まれたとしてもある程度のコミュニケーションはできる。

このような条件を踏まえた上でこれを日本の場合に置き換えて考えてみると、日本人はまだまだこのような環境に慣れているとは言えないだろう。特に英語でのコミュニケーションとなると尚更である。しかし今回のように会場の雰囲気や軽いお酒などを利用することで日本でも試してみる価値はあるだろう。堅苦しい雰囲気のミーティング等だけではなく素直に楽しめる要素も含んだバランスのとれたプログラムによって参加者は多角的に相手の国のことを知ることができる、また、日本でこのようなイベントを開催する場合は、アメリカとは異なり「英語を練習したい」、「異文化にふれあいたい」というある一定人数がアメリカより多いのではないかと考えられる。

改善点としては、上司曰く今回の参加者には日頃オフィス等でやる場合によく来てくれるメンバーからの参加者が比較的少なかったとのことである。週末の混み合う時間であったため駐車場の心配やまた年齢の高い人にとっての少しハードルの高い要素もあったのかもしれない。ここの調整は今後のイベントにおいても改善ができる点である。

5) 謝辞

本基金は研究を進める上で、交通費、宿泊費等の面で大きな支えとなり、円滑に研究を進めることが出来たことに大変感謝いたします。